

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	天神 裕子 【比較社会文化学専攻 平成23年度生】	要 旨
論文題目	”半山”作家林海音の主婦像 —台湾と北京・日本を漂泊した家庭	<p>“半山”とは、日本の植民地時代に大陸に居住し、光復後台湾へ戻った台湾籍の人々を指すが、本論文は、“半山”作家林海音の散文に描かれた主婦像について分析し、1920年代から1950年代にかけて中国大陸と台湾に跨り形成・発信された、一知識人女性の家庭観の意味を考察するものである。林海音が最も精力的に創作活動を行ったのは1950年代～60年代だが、その時期の作品には一貫して女性・家庭の題材が用いられ、林自身の分身のように“自己肯定感の強い近代主婦”像が度々出現する。林海音と同様に、国民党の撤退前後、一群の女性知識人が台湾へ移住し、国民党政府の主導する台湾文壇で作家としてデビューした。“遷台女性作家”と呼ばれる彼女たちは、大陸時代に五四文化運動の洗礼を受け、日本語／台湾語の使用が禁止された当時の文壇において、家庭・女性に関する言説の産出者となった。大陸から台湾という“異郷”への漂泊が、知識人女性—多くは主婦で母親でもあった—の描く主婦像に、どのような影響をもたらしたのか。そしてその中で、“半山”というプロフィールをもつ林海音の描く主婦像には、より複雑なファクターが含まれていたことが推測できる。</p> <p>本論文ではまず、遷台女性作家の多くが作品発表の場とした『中央日報』「婦女與家庭」欄から、謝冰瑩、林海音、鍾梅音らを中心にその言説を分析した。核家族において内助の功を果たしつつ一定の経済力を持ち、主体的に家庭を営む主婦像は、中国の近代化により誕生した“近代家族の良妻賢母”像と重なり、同時に、国民党政府の主導による“反共抗ソ”政策のもとでの、有能で幸福な“自由中国”の主婦像とも重なる部分があった。一方で、仕事と家事の二重負担の問題を提起する作家もいた。遷台女性作家の中で、林海音と鍾梅音の文章には良妻賢母への肯定感が顕著にあらわれている。</p> <p>次に、“外省人である鍾梅音の主婦像を分析し、形成のプロセスと比較するために、後者及び多くの遷台女性作家にとって、台湾が“小家庭”を築く新天地として描かれていることを指摘し、それに対して、“半山”林海音の主婦像の形成は、中国の近代化にともなう近代家族の受容という点では遷台作家と同様であるが、日本の台湾植民地化によりもたらされた台湾人としての微妙な立場、日本の中国大陸侵略にともなう故郷への帰還という背景がある点で、より複雑で重層的なものであることを示した。光復後の“故郷”への帰還を果たした林海音には、故郷の再構築とアイデンティティの確立という自己実現への欲求と、台湾の女性たちを導こうとする強い使命感があり、それが彼女が描く主婦像の形成に影響を与えている。“半山”という二重のアイデンティティを有する彼女が描いた積極的で前向きで、より充実した自己をめざす主婦像は、戦後台湾の政治・社会の要請に適合したものであったが、時代のなかで漂泊した家庭を介して形成されたものであった点で、遷台女性作家群の中でも特殊な位置を占めると結論づけた。</p>
審査委員	(主査) 教授 宮尾 正樹	
	教授 和田 英信	
	教授 岸本 美緒	
	教授 伊藤 美重子	
	准教授 伊藤 さとみ	